

言葉は 通じない

俳人 長谷川 権

中学校の三年間、同じ先生に国語を習った。その授業で宮沢賢治の詩や若山牧水の短歌を知り、「言葉っておもしろいなあ」と思った。大学は法学部だったが、卒業すると新聞社に就職した。その新聞社もいつかやめて、気がついてみると、俳人になっていた。不思議なことに中学の国語の授業で「言葉はおもしろい」と思った、その思いのまま今まで言葉とかわって来たような気がする。教師の感化力はかくも偉大。

俳句は十代から見よう見まねで作ってきたが、あるとき（新米の新聞記者時代だったか）、言葉には意味のほかに風味というものがあることに気づいた。たとえば、「さくら」という言葉は植物学上の桜をさす。これが「さくら」の意味である。しかし、「さくら」には桜という意味しかないかというと、そんなことはない。人の心をふわりと包んで優しくさせる働きがある。これが「さくら」という言葉の風味というものだ。

新聞も詩歌も言葉を使う。しかし、新聞記事は言葉の意味を駆使するが、詩歌は言葉の風味を大事にする。ところが、多くの人は俳句の意味がわかっただけでその句がわかったと思ってしまう。

さまざまの事もひみ出ず桜かな 芭蕉

この句の意味はと問われるなら、桜の花を見ているといろんなことを思い出すということである。しかし、この意味がこの句のすべてではない。言葉の意味は俳句の出発点でしかない。ここからはじまる風味の世界は頭でなく心で味わう。それは意味のように一通りのものではない。

く、人によって、さらにその人の人生経験によって変幻するだろう。

「さくら」の風味の部分、人の心をふわりと包んで華やかにするもの。日本人は昔からこの部分をとりたてて「花」と呼んできた。たしかに学校では「古典文学で花といえば桜のこと」と教える。しかし、桜と花は違う。違うからこそ別の言葉がある。人の心を華やかにする花、その最たるものが桜なのだ。

それから何年かたって、俳句は言葉だけでできていないということに気づいた。たしかに俳句は言葉でできている。しかし、言葉だけでできているのではない。

一月の川 一月の谷の中 飯田龍太

この句の言葉が描いているのは一月の川が一月の谷を流れているという、ただそれだけのこと。そこで何人かの人はい「何てつまらん句だ」と思ってしまう。そういう人はこの句のまわりに広がっている

真白な余白に気づかないのだ。

俳句、とくに名句の場合、言葉より言葉のまわりに広がる余白こそが大事である。むしろ言葉は余白を引き立たせるためにある。ということは、俳句を鑑賞するときは言葉だけに気をとられてはいけないということだ。その句の言葉がどのような余白を作り、どのようにして一句の中に抱えこんでいるか。いつもこのことを忘れてはならない。

さらに何年かたって、言葉とは通じないものだとつくづく思った。外国語の話ではない。同じ言葉を話す者同士のことだ。

たしかに言葉は互いに気持ちを伝えるためにある。そこで言葉を使えば互いの気持ちを通じるはずとあってしまふ。だから黙っていないで、もっとみんなと話そうよ」ということになる。

その昔、就寝中、テロリストに襲われたある首相は銃口を向けられながら「話

せばわかる」といった。非情にも次の瞬間、銃弾が発射されたので首相とテロリストはついに話し合うことはなかったのだが、ほんとうに話せばわかるのだろうか。

あたりを見回してみると、外交問題から夫婦喧嘩にいたるまで世の中のもめごとのほとんどは言葉が原因である。言葉を尽くして話してもわからないどころか、言葉によって誤解を招くことさえある。

それなら言葉を使えば互いの気持ちが通じるなどと安易に信用せず、言葉とは通じにくいものだど覚悟するほうがいい。

そうすると、そんなに通じにくいのなら使い方に気をつけなくてはいけないということに気づき、次には使い方を自分で工夫するようになる。いい加減に話したり書いたりメールを打ったりするのをやめて、言葉についてもっと勉強しよう、書き方や話し方の練習もしようということになるはずだ。これが言葉の学習の原点だろう。

外国語であれば初めから通じないと警戒してかかるから、それが当たり前のことなのだが、母国語の日本語となると、とたんに当たり前でなくなる。子どものころから使っているのだから、通じないはずがないと誰でも思っている。だから言葉で失敗する。

演説や小説のように多くの言葉を費やしてもなかなか通じないのだから、短い俳句はなおさら通じない。だからこそ方が一、通じたときは何にも増してうれしい。これが俳句の喜びというものだ。

長谷川 権
はせがわ けん

1954年、熊本県生まれ。俳句結社「古志」主宰、朝日俳壇選者、季語と歳時記の会代表。東京大学法学部卒業後、読売新聞記者を経て俳句に専念。サントリー学芸賞、読売文学賞を受賞。2004年から「読売新聞」に詩歌コラム「四季」を毎日連載。著書に「長谷川権全句集」「古池に蛙は飛びこんだか」「俳句的生活」「和の思想」などがある。

